金子光晴全集

第三巻

第三巻　詩Ⅲ　鬼の児の唄　人間の悲

金子光晴全集

第三卷

金子光晴全集　第三巻　※　著者金子光晴　※　装幀者司修　※　発行者高梨茂　※　印刷者山田博　※　発行所東京都中央区京橋二丁目一　中央公論社　※　電話(五六一)五九二一　※　振替東京二―三四
©一九七六
昭和五十一年二月十日印刷
昭和五十一年二月二十日発行

詩

Ⅲ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

鬼の児の唄　5
人間の悲劇　73
非情　227
水勢　319
後記　396

鬼の兒の唄

鬼の兒の唄　目次

卵の唄　7
鬼の兒誕生　10
鬼の兒放浪　11
鬼　14
戀　16
瘤　18
冥府吟　24
海戰　25
禿　27
黴　29
血　31
蜆の歌　33
風景　35
骨片の歌　37
福助口上　39
疱瘡　41
業火　42
鬼兒弟ジヤズ團　45
一つの願ひ　47
肌　48
鬼と詩人　49
昇天　51
地獄　52
ネロと紂王　54
殷の紂王　56
桃太郎　57
鬼　60
鬼嘯　66
あとがき　72

卵の唄

——大地獄、小地獄のふつふつとたぎる泥のなかで、鬼は卵を孵す。卵は猶火焔に抱かれてねむる。鳴動する岩、ちぎれとぶ雲。

三本の指をたゝんだ
皺だらけな蹠は
うへむきにひらく。
宇宙が秤る
「我」のおもたさ。

法官たちは
ならんで見護る。
この鬼怪の芽が
殼のなかで
宇宙を夢みるのを。

相剋と、懊悩も、
悲運も、呪詛も
まだ天と地のやうに
はっきりとわかれず、
愛憎も混沌。

透いた血の
籠甲いろのなかに
かたちの影がうごき
まづしのび入る
哀愁。

痣の青と
氷塊のみどりから生れる
乳色のオパールの
ちらばる火が
いのちをみちびく。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

火焔はなめる。
ながい舌で
みじかい舌で。
繻子のやうに包む。
悩みのかたまりを。

七殺の凶運を。
不可解な
智慧の篆文を。
欲望のひこばえ、
禍の端緒を。

鬼の兒誕生

——この畫額をイエス・キリストにささぐ。

鬼の兒が生れた。産聲をきかなかつたか。

鬼の兒が生れた。一から十まで氣に入らぬげな産聲を。

怖るべき批判と達識を養ふため、母の瘦乳を吸ひ、
つのあり、尾あるみどり兒は
寢くたれてゐた。のんだくれのやうに。

鬼の兒が生れた。近隣は瞠目し、
嘲り、のろひ、指さして
家の戸口にひしめき、竝ぶ。

すでに風景は傾き、手ずれ、垢じみた思想によごれはて、

天には馬蠅がびつしりたかり。
季節は息苦しく、地は寢ぐさく、
日を蝕んで骨灰ふる亞鉛の屋根がつみ重なり、生涯ぬけられぬ貧困と
啞、聾、黄疸、中風どもがむらがり。

昭和一七・三月

鬼の兒放浪

——鬼の兒卵を割つて五十年

一

鬼の兒がかへつてきた。ふるさとに。
耳の大きな迷信どもは、
おそるおそる見まもる。この隕石を、

燃えふすぼつた黑い良心を。

かつて、鬼の兒は、石ころと人間共をのせた重たい大地をせおひ、
霧と、はてなきぬかるみを、ゆき惱んだ。

あるひは首を忘れた鷗のとぶ海の淒しるを。
ふなむしの逃げちるふくろ小路を。
暗渠を、むし齒くさいぢごく宿を。

二

こよひ、胎內を出て、月は、
荊藪のなかをさまよふ。

若い月日を、あたら
としよりじみてすごし、

鬼の兒の素性を羞ぢて、

蠟燭のやうに
おのれを吹消すことを學んだ。

天からくだる美しい人の蹠をおもうては、
はなびらをふんで
ふたたびかへることをねがはず、

鬼の兒は、時に、山師共と錢を數へ、
たばことものぐさに日をくらした。

鬼の兒は、憩ない蝶のやうに旅にいで、
草の穗の頭をしてもどつてきた。

鬼の兒はいま、ひんまがつた
じぶんの骨を抱きしめて泣く。
一本の角は折れ、
一本の角は笛のやうに
天心を指して嘯く。

「鬼の兒は俺ぢやない
おまへたちだぞ」

昭和一八・九・三

鬼

死人の膽をとりくらふ茶枳尼(だきに)。

慚恨にねぢくれ、木瘤になつた惡鬼ども。
無頭鬼、いつぽん足。
すだま、また燈臺鬼

きまぐれに人の心にしのびこんで
背信をまき、嫉みをうゑつける
いたづらものの童鬼ども。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com